

『資本論』における「閉ざされた空間」について

梅 垣 邦 胤

はじめに

社会現象に対するアプローチとして、時間軸（歴史的アプローチ）と空間軸（地理的アプローチ）という2つの座標軸を設定するのは、有益な方法であろう。今まで、経済理論においては、理論・歴史的接近が暗黙の前提とされていたように見える。しかし、『資本論』においては明確に、時間軸と空間軸が資本主義経済分析の縦糸であり、横糸であった。例えば、時間軸については、次のような分析がある。貨幣の流通手段機能において「この過程が通る対立して互いに補いあう諸段階は、空間的に並んで現れることはできないのであって、ただ時間的にあいっいで現れることができるだけである」（カール・マルクス『資本論』大月書店、第1巻、156頁～157頁。『資本論』からの引用は以下同様である）といわれ、時間と空間が意識的に区別され「時間軸」分析であることが明確に主張されている。資本主義自体の歴史的位置に関する深い分析においても、「時間＝歴史」が意識されている。「労働の生産性」は、何十万年も人類が営々と積み重ね、後退し、崩壊し、しかしその中で前進してきたもの、資本主義はそのような歴史を土台として形成された。「資本関係がそこから出発する基礎となる既存の労働の生産性は、自然のたまものではなく、何千もの世紀を包括する歴史の所産なのである。」（664頁）

「空間」についても、貨幣篇において「無関連な、同時的な、したがってまた空間的に並行する売りまたは部分変態」（156頁）が対象とさ

れている。「一国では毎日多数の同時的な、したがってまた空間的に並行する一面的な商品変態が、言い換えれば、一方の側からの単なる売り、他方の側からの単なる買いが行われる。」（154頁）

本稿の課題は2点である。第1点は、『資本論』自体にはあったが、その後、意識されることが少なかった、資本主義分析における2つの軸、とりわけ、「空間軸」に焦点をあわせ、若干の検討をすることである。第2点は、直接には『資本論』を素材としているが、現代の世界に関する現実感覚、21世紀資本主義を念頭において、つまり、現代と往復をしつつ経済学の古典を探索することである。「空間軸」を検討すること、生き生きとした現実感覚と古典研究を交錯させること、この2点が課題である。

問題関心を若干先取りした形で述べれば、時間軸と交錯する空間軸は、例えば、「経済圏」として把握することができる。時間軸に対する空間軸につき検討することが直接的課題であるが、副次的には、その空間がそれぞれ「閉ざされている」という点に注目している。

世界市場においては複数の経済圏が存在するが、それぞれは互いに対しては、視覚はさえぎられ、その意味で「閉ざされている」。

閉じられた経済圏—その単位は1個人、1家族、1地域、1共同体、1民族、1国家、複数の国家、と重層的かつ有機的対象である。孤立している状態と、関連する状態、融合する状態、このどれかに位置する。「閉ざされた経済圏」は個人単位においても、民族単位においても、複

数の国家においても成立可能である。複数国家の経済圏はブロック経済と呼ばれるがそれは死語になったわけではない。有機的に、地域、複数の経済圏・地域の接触、世界市場として総括される。水平状態で累積する層の集合ではなく、水平的、さまざまな角度で傾斜する面、垂直的に入る面など錯綜する無数の面の総体として世界市場はある。その、多様な角度を持った面が上でいう個人、家族、地域、共同体、民族、国家、複数の国家である。

このようなテーマ設定で、念頭においていることは、世界経済で突出した繁栄を示す経済圏についてである。特定の経済圏が勃興し、繁栄し、したがって世界の多くの富と貨幣が集散する中心地となり、そして没落をしていく。また、別の地域、経済圏が勃興、繁栄、没落していくという流れがある。繁栄する経済圏が空間的に移動していくという事実である。ある一国が歴史上繁栄期に達しているということは空間的には繁栄の中心地が他の国から当該国に移動したものである。ここに時間軸と空間軸は交錯する。

アメリカの金鉱の発見、アフリカの黒人奴隷などに立脚する、スペイン、ポルトガル、オランダ、フランス、イギリスという中心地が移動するその序列は、資本主義の生成の時代に、地域としてはヨーロッパであるが、その内部において、このような諸国が順次繁栄の中心地となり、よって複数の国家による複合的な原始的蓄積が行われたことを示している。

「アメリカの金銀産地の発見、原住民の掃滅と奴隷化と鉱山への埋没、アフリカの商業的黒人狩猟場への転化、これらの出来事は資本主義的生産の時代の曙光を特徴づけている。このような牧歌的な過程が本源的蓄積の主要契機なのである。これに続いて、全地球を舞台とするヨーロッパ諸国の商業戦が始まる。それはスペインからネーデルランドの離脱によって開始され、イギリスの反ジャコバン戦争で巨大な範囲に広

がり、シナにたいする阿片戦争などで今なお続いている。いまや本源的蓄積のいろいろな契機は、多かれ少なかれ時間的な順序をなして、ことにスペイン、ポルトガル、オランダ、フランス、イギリスの間に分配される。……。どの方法も、国家権力、すなわち社会の集中された組織された暴力を利用して、封建的生産様式から資本主義的生産様式への転化過程を温室的に促進して過渡期を短縮しようとする。暴力は、古い社会が新たな社会をはらんだときにはいつでもその助産婦になる。暴力はそれ自体が1つの経済的な潜勢力なのである。」(980頁)

(注) このような転化過程における暴力の役割を指摘している。発達した資本主義に至る前段において、「過渡期を短縮」するためには暴力が必要である。いわゆる、アジア諸国における開発独裁、旧ソ連などは客観的には「資本主義を誕生させる」役割を果たした。この点、大西広の論考がある。大西広『資本主義以前の「社会主義」と資本主義以後の社会主義—工業社会の成立とその終焉』(大月書店、1992年) 大谷禎之介・大西広・山口正之編『ソ連の「社会主義」とは何だったのか』(大月書店、1996年)

梅棹忠夫は『文明の生態史観』(初出『中央公論』1957年2月。引用は中公文庫から)において「空間」に注目し「現代の世界という空間の中で、日本が占めている位置の、正確な座標を決定すること。これが当面の課題である」(81頁)とする。近代において、「高度の文明国」になったのはユーラシア大陸の東の端の日本と西の端の西ヨーロッパ諸国のみであり、残る中央部(東南アジア、南アジア、旧ソ連など)は「格段の差」がある。

前者は第1地域、後者は第2地域といわれる。近代以前は、第2地域が古代文明の中心地域であり、また「破壊と征服の歴史」を経験した。

そのころ、第1地域は「辺境」であり、例えば日本は奈良、平安など中心国中国の隋、唐の「イミテーション」国家を作った。

近代における第1地域は、日本、西ヨーロッパとも封建制の時代を経験している。両地域は、封建制を土台とし、文明国になった2つの地域であり、いわば「平行進化」(89頁)の結果である。日本は鎖国をしなければもっと早くに産業革命段階に達していた可能性がある（日本は欧米と「平行」的な対等の関係であり、欧米が上で、日本が下という価値観から解放されていることは注目される）。この間、第2地域は植民地になりまた独裁国家となった。このような分析の後、梅棹は、現在は再び、第2地域が勃興してくる時期とする。「現代は、一口にいえば、第2地域の勃興期だ。……近代化、文明化……第1地域の人たちの生活に接近するだろう。……第2地域は、将来4つの巨大なブロックの並立状態にはいる可能性がかなりおおいとおもう。中国ブロック、ソ連ブロック、インド・ブロック、イスラム・ブロックである。」(108頁)これが書かれたのは1957年である。1990年代がアジアの奇跡といわれ、ニーズ、アセアン、中国がハイレベルな成長率を経験し、また97年にはタイにおける通貨危機を基点とする成長の鈍化をへている。日本と中国は将来、ライバルになるのかプラスサムの関係なのか、アジアは今後とも平和な地域なのか、紛争地域になるのかという論争があり決着はついていない。日本が、1980年代後半からバブル経済の時期を経験し、その後の長期不況のなかで、設定すべき現代的な課題は、日本が不況から好況局面に景気が転化する条件が、このようなアジア、アメリカなどの環境との連動によって規定されていることの論証にある。論争があること自体、この地域が注目をされ、繁栄の一中心地になる確かな見通しがあることになる。梅棹は、半世紀以上も前から、第2地域の勃興を指摘していたことは、

科学的分析の有効性を鮮烈な形で示していたこととなる。なお、日本を西ヨーロッパと「平行」関係で捉えたことは、日本の国家としての自主的決定の意味、日本文明の可能性、アジア経済圏における日本（欧米との緩やかな経済的、政治的な交流とつながるかたちにおけるアジアにおける日本というテーマ）などとして現在はより具体的にかつ現状から大幅に方向転換をする必要性とその困難性をもつテーマである。

空間軸については、例えば、原洋之介は「地域研究と経済理論がどううまく接合しえていないのではないか」という重要な疑問(東南アジア研究会編『社会科学と東南アジア』勁草書房、1987年。「東南アジア農村社会論—地域研究と経済理論」3頁)を提出している。グローバリゼーションといわれるが、世界の各地域、とりわけアジア各国はそれぞれ固有の文化を持っており、100%グローバル化は不可能である。各社会の基層部分には経済的普遍化を拒否する個別文化がある。これが、つまり、経済理論において、個別的、地域的特性は普遍的理論を拒否するファクターであり、「重要な疑問」の内容である。本稿は、グローバリゼーションと地域、あるいは普遍性と個別性といった問題関心からではないが、この地域性の問題を念頭に置きつつ、『資本論』を見直した一記録である。念頭にあるのは、現在の日本そして21世紀のアジアである。

以上のことを念頭におきつつさしあたり本稿においては、『資本論』における「空間・地域」というテーマで検討する。生き生きとした現実感覚と経済学の古典研究を交錯させ、そこから現代資本主義に関する断片をつかむことは一つの意味ある試みであろう。

複雑で多様な歴史的、空間的存在である資本主義は、土台としての商品貨幣関係と、その上で運動する資本・土地所有・賃労働関係と論定することができる。『資本論』が方法的に優れて

いる点は、このような、直感的な資本主義把握に基づき、土台としての商品貨幣関係をまず分析し、それを前提にして資本関係を対象としている。対象分析において、一挙にすべてを論じるのではなく、質としての労働と量としての労働時間をベースにすえた、価値の分析、剰余価値の分析をし、その上で生産価格、利潤などの現象分析を行っていることである。1度には1つだけ取り出して、分析し、分析が終われば、また新しい要素を対象にし分析している点である。一度に分析されるのは1つだけである。第2点は、あまり指摘されていないことだが、『資本論』においては、明確に、時間軸と空間軸という基準が意識され、それを念頭に置きつつ、理論展開が図られていることである。特に、第2の点については、その具体的な箇所を引証し論証していきたい。

第1章 商品論における時間軸と空間軸、地域経済圏

商品生産者（販売者）Aにおける、もっともシンプルな行動軌跡は、自らが所有している商品（ W_1 ）を販売し、貨幣に転化し、貨幣で自らが必要とする商品（ W_2 ）を購入するところまで、 $A(W_1-G-W_2)$ との式で表現することができる。ここで商品の「生産」でなく「所有」としているのは、自らが生産者である場合、あるいは他者の生産物を所有し、転売可能な場合を含むからである。所有の根源を労働におくならば、所有者はすべて「生産者」である。「自己労働に基づく所有」は根源的には正当な原理である。ここで、物事は二段重ねになっている。所有の正当性が問われる場合、それが所有者自身の労働の成果であるか否かが問題である。経済学的な意味において、人間がすべからず平等であるべきならば、それぞれが労働遂行者であること、互いにそれを認め合うことであろう。このよう

な基準は、継承保存されているが、しかし、その上を覆う基準がこれも厳然として機能している。それは、所有者として登場している限り、そのものが、所有者自身の労働によるものか、譲渡されたものか、略奪したものか、交換の相手方、つまり貨幣所有者は判断する必要はない。そのものの、正当な所有権があると見られれば、その商品はその人のものであり、販売、購買は成立する。ここに、すでに、所有と「閉ざされた空間」への扉はすでに開いている。 $A(W_1-G-W_2)$ は、Aにとっては、販売と貨幣取得すなわち時間軸、時間的経過を前提にしている。 (W_1-G) があり、それを待って、はじめてその貨幣による購買（ $G-W_2$ ）が可能である。しかし、ここに同時に空間軸が含まれている。 (W_1-G) は社会における販売一般を示しており、 $(G-W_2)$ は購買一般を示している。Aは売買において相対する不特定の経済人をもっており、したがって不特定多数の者が空間的に存在する中にAもいる。

不特定多数とした点さらにAに則して見る。 $A(W_1-G-W_2)$ としたが、Aはただ W_1 のみを生産、販売しているわけではない。同種の異なる商品を複数販売しており、それは例えば、 $A-W_{1/1, 1/2, 1/3, \dots}$ と表現できる。各商品の個数もことなりそれは、それぞれの商品の前に数字を入れることにより表現される。Aが購買する商品は、多様性（後に出てくる）という点では、販売する商品を凌駕する。パンの生産者は、さまざまな種類のパンを製造する。しかし、パンという点では同種のものを大量に生産している。それを販売し、貨幣に転化した後に、貨幣で購入する商品種類は無数であり、多様である。大きくは、パンを焼く機械を商品として購入する。その一家が生活のために必要なものの総体を購入する。購入する商品の系列は $A-W_{2/1, 2/2, 2/3, 2/4, \dots}$ と表現される。このように、複数の商品種類が販売、購買されることは、

目に見える居住空間としての地域レベルから世界市場まで、無数の独立した商品生産者が「空間的に」点在していることをイメージさせる。ややわき道にそれるが、1点のみ、付け加えたい。「独立した商品生産者」には、個人、家族など他人を雇用せずに商品を生産する場合と、一つの独立した資本として、例えば株式会社として、資本・賃労働関係により商品を生産している場合とがある。どちらも、独立しているのであるから「営業の自由」を体現している。同時に「自由」な「閉ざされた空間」において「自由」の侵害が可能な条件となっている。この点改めて、『資本論』貨幣の資本への転化で、見られる。

同じことを『資本論』貨幣の流通手段機能に即して見直す。今まで、生産者はAのみであった。しかし、商品世界では生産者は無数である。それは、一步具体的には、B、C、D、E……などと表現できる。さしあたりかれらは、貨幣が通流する各通過点に立っている。

A $W_1 - G - W_2$

B $W_2 - G - W_3$

C $W_3 - G - W_4$

D $W_4 - G - W_5$

Aが商品 W_1 を販売できることは、Bが商品 W_2 をAに販売できる条件である。Bが販売できることがCの販売の条件となる。以下同様である。これは、時間軸のうえで、順次、次の購買販売が成立するのはその前の購買、販売が成立しているからである(好況)。成立していることが、順次、円滑に進行していく条件である。ある箇所までストップすれば、それ以降の、売買は不可能となる(不況)。それぞれは、互いに無関係であり、自立しており、自らの私的利益を忠実に追求することがその人の権利であり、義務である。ばらばらな無数の私的所有者だけからなる社会で、このような相互前提関係が存在している。これは、資本主義の土台である、商

品貨幣関係に特有のものであり、直接に自然経済で生活をしている場合には見られない「社会関係」である。「商品生産」は、互いに無関係でありそれだけでも、ある特定の「閉じられた空間」を連想させる。しかし、また、閉じられることで自足してはならず、必ず、どこかで、いつか「接触」がある。

ここまでは、無数の生産者を時系列に並べたものであった。しかし、同じ生産者は、空間的に、同時に並んでいるからこそ、この売買の系列と貨幣の通流が可能となっている。A、B、C、D……からなる商品社会である。A、B、C、Dは、例えば、次のいくつかの事例のように自由に想定することができる。それぞれ、第1次(狩猟、採取、農業、漁業、など)第2次(産業革命以降の製造業、IT産業、運輸業など)、第3次(商業、旅行業、金融業など)のどれかに属し、第1次産業、第2次産業、第3次産業の諸商品を相互に交換し、それぞれはすべての部門の商品を享受することが可能である。あるいは同じ、商品社会は生産手段生産部門と消費資料生産部門のどれかでありうる。機械をつくる機械、消費財を作る機械、原材料を作る機械、原材料を生成する産業、それぞれの部品をつくる、消費財を作る、その添加物を作るなどなどが独立した商品群である。

(注) 第I部門 生産手段生産部門、第II部門 消費資料生産部門は、発達した資本主義国、国民経済内部の、主要な2部門である。しかし、『資本論』では、歴史的には、第II部門の比重が圧倒的であった段階から、第I部門の比重が大きくなる過程として、把握可能としている。資本主義分析は、非資本主義的ファクターを的確に、比較の対象として、また資本主義とも連動する対象として組み込むことによって、ダイナミックな、つまり、本質に迫る分析が可能であることが示されている。「外的な自然条件は経済的には二つの大き

な部類に分かれる。生活手段としての自然の富、すなわち土地の豊かさや魚の豊富な河海などと、労働手段としての自然の富、たとえば勢いのよい落流、航行可能な河川、樹木、金属、石炭、等々に分かれる。文化の初期には第1の種類の自然の富が決定的であり、もっと高い発展段階では第2の種類の自然の富が決定的である。たとえば、イギリスをインドと、また、古代世界でならばアテネやコリントを黒海沿岸諸国と比較せよ。」(664頁)

A, B, C, D……は、海浜の村と山村と、日本の各都道府県の特産物、あるいは、沖縄の特産物と、東北、北海道、アイヌの特産物との想定が可能である。A, B, C, D……は、アジア、アメリカ、ヨーロッパまた、アジア内諸国の諸商品である。「種々の国々をその構成部分とする世界市場」(728頁)である。このように『資本論』貨幣篇は、時間的序列を表現しており、かつ、空間を組み込んだ世界となっている。

レーニンが「何十億回となくくりかえされる大量的な交換現象」(レーニン「カール・マルクス」大月書店、28頁)といった、同じ世界である。

商品生産社会の内容は、このように、時間軸と空間軸の組み合わせとして把握しうる。ここに、「空間軸」を特に強調する由縁である。

複数の「空間」は、より具体的には例えば複数の「経済圏」である。『資本論』は明確に「経済圏」について正面から触れているわけではない。しかし、事実としては、さまざまな形で、「地域経済圏」を論じている。

先には、商品生産者は、A, B, C, Dなどとして表現し、同時に彼らが、生産する商品種類は異なること、またそれぞれが1種類ではなく多種類、同類多種の商品を生産していることが示された。この点は、『資本論』では、資本主義とその土台である商品関係の根本条件としている。異なる「共同体」分析がそれである。

歴史を遡ればのぼるほど、地球上の各地に点在する各共同体は、互いにそれぞれのみが唯一の「社会」とありとし、その内部に向かい生存している(現在形をとったのは、現代においても「自分が属する共同体=唯一の社会」があるとの意識があるからである)。時間の経過の中で、独立していた共同体の生活圏域がそれぞれ拡大し、ある時点で両者が接触する。あるいは、後に述べるが、商人が両者を媒介し、一つの経済圏を構成する二つの共同体という位置づけが新しく生まれることもある。「商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる。しかし、物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それは反作用的に内部的共同生活でも商品になる。」(118頁)

しかし、二つの共同体がまったく、同じもののみを生産している場合は、両者の間には交換関係も、したがって両者を結ぶ経済圏も成立不可能である。差異、区別がある、複数の、異なる地域の家族、種族、共同体、そして都市と農村の接触があること。つまり単色ではなくて多様性が互いの好奇心を刺激し個人における所有対象が豊かになり、感性の水準が高まる条件である。地球上の各地域における、土地の性状、気候、植物の種類、野生動物の種類、あるいは、育成した穀物の種類、土器の形状、文化、風習の違いなどなどを視野に収め、この「自然発生的な相違」が、共同体が接触したときに互いに互いの対象が、いままでは、閉ざされていた段階では、見ることが出来なかった「新しいもの」として欲望対象と交換対象となる。『資本論』では、これを、「分業」論の観点から、整理している。一共同体内部では、最初から、男と女、青年と高齢者、などの違いに適合的な共同体内分業がある。その共同体が他の共同体と接触し、それぞれの自然的条件、生産物、文化、風習が異なっているとき、両共同体は相互に交換関係

に入り、ここに、「商品」が生まれ、以後、不可逆的に商品流通の範囲は広がりを見せていく。

「一つの家族のなかで、さらに発展しては一つの種族のなかで、性の区別や年齢の相違から、つまり純粹に生理的な基礎の上で、自然発生的な分業が発生し、それは、共同体の拡大や人口の増加につれて、またことに異種族間の紛争や一種族による他種族の征服につれて、その材料を拡大する。他方、……生産物交換は、いろいろな家族や種族や共同体が接触する地点で発生する。なぜならば、文化の初期には独立者として相対するのは個人ではなくて家族や種族などだからである。共同体が違えば、それらが自然環境の中に見出す生産手段や生活手段も違ってくる。したがって、それらの共同体の生産様式や生活様式や生産物も違っている。この自然発生的な相違こそは、いろいろな共同体が接触するときに相互の生産物の交換を呼び起こし、したがってこのような生産物がだんだん商品に転化されることを呼び起こすのである。交換は、生産部面の相違をつくりだすのではなく、違った諸生産部面を関連させて、それらを一つの社会的総生産の多かれ少なかれ互いに依存しあう諸部門にするのである。この場合に社会的分業が発生するのは、もともと違っているが互いに依存しあってはいない諸生産部面のあいだの交換によってである。……生理的分業が出発点になる場合には、一つの直接に結合されている全体の特殊な諸器官が、他の共同体との商品交換から主要な衝撃を受ける分解過程によって互いに分離し、独立して、ついに、いろいろな労働の関連が商品としての生産物の交換によって媒介される点に達するのである。一方の場合には以前は独立していたものの非独立化が行われるのであり、他方の場合は以前は独立していなかったものの独立化が行われるのである。すべてのすでに発展していて商品交換によって媒介されている分業の基礎は、都市と農村との分離

である。社会の全経済史はこの対立の運動に要約されるということが出来る……」。(461～462頁)

したがって、豊かであっても単色、単調な社会同士の間には、交換は発生せず、商品関係は規定的とならず、そのような地域においては、交換とそれを通じる利潤目当ての社会システムつまり、資本主義経済は成立しない。「最も豊饒な土地が資本主義的生産様式の成長に最も適した土地だということにならない。この生産様式は人間による自然の支配を前提する。あり余る自然は……人間を自然の手に頼らせるのである。このような自然は、人間自身の発達を自然必然性にするものではない。植物の繁茂した熱帯ではなく、むしろ温帯こそは、資本の母国である。土地の絶対的な豊かさではなく、土地の分化、土地の天然産物の多様性こそ、社会的分業の自然的基礎をなすものであり、人間を取り巻く自然環境の変化によって人間を刺激して人間自身の欲望や能力や労働手段や労働様式を多様化させるものである。」(665～666頁)

やや、引証が長くなったが、諸「共同体」として、「地域経済圏」が分析されていたこと、多様性や差異が、交換と資本主義の前提であり、土台であったことが示された。同時に、交換関係に入ったとしても、一共同体は一共同体としての個性を保ち続けるのであり、その意味で閉じられており、交換は「両者の単なる接触」である。

(注)「食物や衣服や採暖や住居などのような自然的な欲望そのものは、一国の気象その他の自然的な特色によって違っている。」(224頁)

世界市場に至る広がりにおいて、それぞれの経済圏が生み出す種類が異なる生産物との接触が語られる。

「社会の中での分業のための豊富な材料をマニュファクチャー時代に供給するものは世界市

場の拡大と植民制度であって、これらはマニユファクチャー時代の一般的な存在条件に属するものである。」(464頁)これは「諸国間の物質代謝」(187頁)である。

第2章 『資本論』における空間あるいは地域

本章の課題は、イギリスとアメリカ、発達した資本主義国と前資本主義地域など展開のあとを整理することである。時間軸と空間軸は厳密に方法的に意識され分析の指針になっている。「労賃の国民的相違」を素材にあらかじめ検討する。資本主義の一般分析、つまり範をイギリスにとっているとはいえ、発達した資本主義(「社会的総資本の再生産と流通」における第I部門と第II部門の両産業部門が成立している国がそれである)の一般法則が展開されるところで、複数の国があらわれ、その違いに関心が寄せられること自体、新鮮な印象を受ける。労賃については、基本的に時間賃金と個数賃金の2つであり、時間賃金は労働時間の長さ、あるいは同一企業における勤務期間の長さにより賃金が決められる。個数賃金は、作られたものの個数で、つまり結果あるいは業績によって決められる。時間の長さ、経験の長さか、成績、実績によるのかという違いである。賃金は基本的にはこの2つのファクターのどちらのウェイトが重いかによって類型化されてくる。「労賃の国民的相違」は逆に複数の国々があり、一般法則においてその国々は念頭に置かれているが、それは国民的相違と見えるものが、労賃に関する一般理論の枠内にある類型のどれかにはまっていくなというのである。「労賃の運動の諸法則……この運動の中で変動する組み合わせとして現れるものは、違った国々については国民的労賃の同時的相違として現れうるものである。だから、諸国民の労賃を比較するに当たっては、労働力の価値の大きさの変動を規定するすべての契機

を考量しなければならないのである。すなわち、自然的な、また歴史的に発達した第1次生活必需品の価格と範囲、労働者の養成費、婦人・児童労働の役割、労働の生産性、労働の外延的および内包的な大きさがそれである。」(727頁)ここでは空間軸は「国民的労賃の同時的相違」であることが確認されればよい。

以下、『資本論』における国家間の関係、国際関係を、項目別に分類して示したい。もとより、国際関係を分析した作品ではない。しかし、見られるように、現代資本主義が含んでいる、先進と後進との関係、資本主義による他の経済社会への支配、国際的連動関係、労働者の移民、機械の充用と賃金水準、後進国経済の原料供給地への改変、国家間競争、伝染病の国際的伝播など今日の問題が指摘されている。

- ① 資本主義の典型的な国は、他の遅れた国にとって、自らの将来像を示すモデルである。イギリスが資本主義経済の「典型的な場所」(8頁)である。ドイツでも「ひとごとではない」。(9頁)「産業の発展の高い国は、その発展のより低い国に、ただその国自身の未来の姿を示しているだけである。」(9頁)「1国は他国から学ばなければならないし、また学ぶことができる」(10頁) 日本、ニーズ、アセアン、中国の關係に投影できるテーマである。
- ② 前資本主義段階の地域は、それが支配的な段階であれば、純粋に、自然経済、奴隷制などを維持できる。資本主義の時代においては、それらの地域は、それ自体としては、前資本主義的経済であっても、資本主義的なものに組み込まれ、合成される。「その生産がまだ奴隷労働や夫役などという低級な形態で行われている諸民族が、資本主義的生産様式の支配する世界市場に引き込まれ、世界市場が彼らの生産物の外国への販売を主要な関心事にまで発達させるようになれば、そこでは奴隷制

や農奴制などの野蛮な残虐の上に過度労働の文明化された残虐が接木されるのである。それだから、アメリカ合衆国の南部諸州の黒人労働も、生産が主として直接的自家需要のためのものだったあいだは、適度な家父長制的な性格を保存していたのである。ところが、綿花の輸出が南部諸州の死活問題になってきたにつれて、黒人に過度労働をさせること、所によっては黒人の生命を7年間の労働で消費してしまうことが、…」行なわれる。(306 ㊦)

- ③ アメリカとヨーロッパ、この2つの地域における、事件は互いに共鳴しあい、連動しあい、躍動し、そのようにして歴史は進む。アメリカの独立戦争は、植民地からの独立とヨーロッパにおける旧支配階級の支配に対する中間階級の独立という関係、南北戦争は南部黒人の解放とヨーロッパの労働者の解放として共鳴しあった。「18世紀のアメリカの独立戦争がヨーロッパの中間階級のために警鐘を鳴らした」。「19世紀のアメリカの南北戦争はヨーロッパの労働者階級のために警鐘を鳴らした」。(10 ㊦)「ヨーロッパでの賃金奴隷制の隠された奴隷制は、新世界では文句なしの奴隷制を脚立として必要としたのである。」(990 ㊦)

変革と変動が国際的規模で波及する。しかし、変革の課題は国や地域によってそれぞれ異なる。そして、ここに見られるのは明らかに空間軸であり、異なる地域の相互作用と歴史の進歩との関連である。

「原住民の取り扱いが最も強暴だったのは、もちろん、西インドのような輸出貿易だけを使命とした栽培植民地であり、メキシコや東インドのような豊かな富と稠密な人口をもちながら強盗殺人の手に任された国々だった。」(983 ㊦)

「属領ではあらゆる産業が暴力的に根こそぎ

にされた。たとえば、アイルランドの羊毛工業がイングランドによってそうされたように。」(987 ㊦)

「イギリスは……黒人をスペイン領アメリカに供給する権利を手に入れた。……。奴隷貿易は、本源的蓄積のリバプールの方法をなしめている。」(990 ㊦)

以上の引用においては、西インド、メキシコ、東インド、アイルランド、イングランド、リバプール等、地域経済がイメージされている。

- ④ ロンドンへは、スコットランド、イングランドの農村、ドイツから労働者が移民してくる。製パン業における40代の死亡という過酷な労働環境であっても過剰な労働者が押し寄せる。「42歳まで生きるとはまれ……それにもかかわらず、製パン業はいつでも志願者にあふれている。ロンドンへのこの‘労働力’の供給源は、スコットランドであり、イングランドの西部農業地帯であり、そしてドイツなのである。」(328 ㊦)
- ⑤ イギリス、ドイツ、フランスなど先進国で発明された機械は、当該国で使われるとは限らない。賃金が高い国では、最新の機械を購入することにより、労働力を過剰化し、賃金を切り下げるであろう。賃金が低い国では労働力に依存する比重は高く、したがって最新の機械は充用されない。ここでは、国による賃金の高低と最新の機械を採用するか否かが論じられ、国レベルで複数の「地域」が取り上げられている。賃金水準の低い国は、機械導入の意欲が低く、いつまでも低賃金労働に依存する結果、国際競争力が衰え、一種の不均衡発展として、中心国が転変していく。「今日イギリスで機械が発明されてもそれが北アメリカでしか用いられないとか、16世紀と17世紀にドイツで発明された機械がオランダだけで使われたとか、18世紀/にフランスでな

された多くの発明はただイギリスで利用されただけだというようなことになるのである。古くから発達した諸国では、機械そのものが、いくつかの事業部門へのその応用によって、ほかの諸部門で労働過剰を生み出し、そのために、これらの部門では労働力の価値よりも下への労賃の低落が機械の使用を妨げ……」(512~513 頁)

- ⑥ 周辺諸国は先進国の原料供給地に改変される。中心と周辺の関係、さらに、労働力の国外移動、国際分業等が見られる。「この拡大能力はただ原料と販売市場とにしかその制限を見出さないのである。機械は一方では原料の直接的増加を引き起こす。たとえば繰り綿機が綿花生産を増加させたように。他方では、機械生産物の安価と変革された運輸交通機関とは、外国市場を征服するための武器である。外国市場の手工業生産物を破滅させることによって、機械経営は外国市場を強制的に自分の原料の生産場面に変えてしまう。こうして、東インドは、大ブリテンのために綿花や羊毛や大麻や黄麻やインジゴなどを生産することを強制された。大工業の諸国での労働者の不断の「過剰化」は、促成的な国外移住と諸外国の植民地化とを促進し、このような外国は、たとえばオーストラリアが羊毛の生産地になったように、母国のための原料生産地に転化する。機械経営の主要所在地に対応する新たな国際分業がつくりだされた。それは地球の一部分を、工業を主とする生産部面としての他の部分のために、農業を主とする生産部面に変えてしまう。この革命は農業における諸変革と関連する」(589 頁)。

- ⑦ ヨーロッパ、アメリカ、アジアという連関が指摘される。「1815 年—1830 年には大陸ヨーロッパおよび合衆国との競争が始まる。1833 年からはアジア諸市場の拡張が、‘人類の破壊’によって強行される。」(598 頁)

- ⑧ 日本、南アメリカ、ヨーロッパ各国からイギリスへの、寝具などの原料としての「ぼろ」の輸入、選別女工における伝染病の流行、伝染病の国際的伝播が語られている。19 世紀の環境問題への言及である。「大ブリテンは、それ自身の無数のぼろは別としても、全世界のぼろ取引の中心地になっている。そこにはぼろが日本やはるか遠方の南アメリカ諸国やカナリア群島から流れ込む。しかし、その主要供給源は、ドイツ、フランス、ロシア、イタリア、エジプト、トルコ、ベルギー、オランダである。それは肥料にされ、毛くず（寝具用）やショディ（再生羊毛）の製造に用いられ、また紙の原料として役立つ。ぼろ選別女工は、まず彼女たち自身を最初の犠牲にする天然痘その他の伝染病を持ちまわる媒体として役立つ。」(604 頁)

- ⑨ 貿易と国際交通、運輸における営業独占について。「イギリス東インド会社は、東インドでの政治的支配権のほかに、茶貿易でもシナ貿易一般でも、また、ヨーロッパとのあいだの貨物輸送でも排他的独占権を与えられていた。しかし、インドの沿岸航行と島よ間の航海とインド内地の商業とは、会社の高級職員の特権となっていた。」(982 頁)

- ⑩ 一国の資本を守る手段としての保護貿易について。「土着のロシア人資本家は工場事務が不得手だからである。ひどい過度労働、絶え間ない昼夜作業、労働者たちの法外な過少賃金にもかかわらず、ロシア製品はただ外国製品の禁止によってやっと息をついている。」(730 頁)

第3章 閉ざされた空間

空間の単位として個人、特にその心的世界、家族、地域、民族、国家、複数の国家群があり、その総体として世界市場がある。それぞれは、

内部に向かうとき、外から見ればそれぞれの単位は外に対して「閉ざされた空間」となる。このもつ意味は二面的である。一面では、その内部において、外から干渉されない自由と、自立が保障されていることになる。内発的な発達と発展、繁栄の場になることができる。外から、第3者によって監視されなくても、発達と繁栄の「空間」となる。

他面では、これは閉ざされているがゆえに、その内部において何が行われようと外からは分からない空間となる。つまり、人権を封殺する振る舞いがあっても外からは分からず、この空間が破壊されない限り、自分の子供、親、祖父母、その空間に入ってきた他人の自由に干渉し、邪魔をし、人権の抑圧や民族圧殺、犯罪行為などが継続して成立可能な「空間」となる。

最初に、本稿の課題の第2として「生き生きとした現実感覚と古典研究を交錯させる」ことをあげた。書かれた動機の一つは、この、第3者から遮断された世界における身体的、精神的暴虐である。個人における自傷行為、自殺、自らに対する精神的圧迫（他人があなたを許しても、あなたはあなた自身を許すことが出来るか、という問いかけ）、精神的空間・生活空間における侵略者としてのストーカー、セクシャルハラスメント、家という「閉ざされた空間」における子供による親殺し、母親による幼児虐待、致死、夫による妻への暴力、家への他人の子供の誘拐、閉じ込め、虐待、第3者から遮断された地域における犯罪、ポーランドのアウシュビッツなど特定の「閉ざされた空間・地域」における大量虐殺（これは、連合軍という第3者が外から進入するまで継続した）等々の「諸現象」である。

『資本論』第1巻は「資本の生産過程」と題され、剰余価値の生産（絶対的、相対的）とその繰り返しとしての資本蓄積が分析されている。注目されるべきは、それへの導入部に当た

る「貨幣の資本への転化」における文言である。

資本は閉ざされた空間であり、その中は資本・賃労働関係という資本の支配の場であるが、それは閉ざされている。

アウシュビッツもDV、幼児虐待、密室殺人が行われる場所も閉ざされていた。

労働時間と自由時間の区別、後にA・センが説いた「潜在能力」の権限と人間発達の問題、長時間労働と人間破壊、そして労働時間の法定などが説かれた絶対的剰余価値の生産、競争関係と技術進歩、協業・分業と資本の生産力、企業内分業と社会的分業などが説かれた相対的剰余価値の生産、そのような「生産の現場」への回路を準備したもの、それが「貨幣の資本への転化」章である。剰余価値が生産されるのは、商品生産者同士が、次々と購買と販売により「接触」をすることが必要条件であるがそれは十分条件ではない。「生産」は「資本による商品生産」の場、個別資本の内部世界である。「流通の背後」であり、「外」である。「流通」つまり万人の交流の場ではないところにおける、つまり「閉ざされた空間」における、労働力商品の購買者と「彼自身の商品」としての賃金労働者（人間）との関係において剰余価値は生まれる。「剰余価値は流通から発生することができないのだから、それが形成されるときには、流通そのもののなかでは目に見えないなにごとかが流通の背後で起きるのでなければならない。……。流通は、商品所持者たちのすべての相互関係の総体である。流通の外では、商品所持者はもはやただ彼自身の商品との関係にあるだけである。」

（216頁）

「隠れた生産の場所」、第3者は「立ち入り禁止」の空間、独立した商品生産者が接触する空間から遮断された空間、ほくそえむ資本家と自分の革まで加工される賃金労働者という一連の風景が語られている。「労働力の消費は、他のどの商品の消費と同じに、市場すなわち流通部面

の外で行われる。……隠れた生産の場所に、無用の者は立ち入るなと入り口に書いてあるその場所にいくことにしよう。……貨殖の秘密もついにあばきだされるにちがいない。自由、平等、所有、そしてペンサム……各人がただ自分のことだけを考え、だれも他人のことは考えないからこそ、……全体の利益の、事業をなしとげるのである。……いまこの部面を去るにあつたって、われわれの登場人物たちの顔つきは、見受けるところ、すでにいくら変わっている。さっきの貨幣所有者は資本家として先に立ち、労働力所持者は彼の労働者として後についていく。一方は意味ありげにほくそえみながら、せわしげに、他方はおずおずと渋りがちに、まるで自分の皮を売ってしまってもはや革になめされるよりほかにはなんの望みもない人のように。」(230～231 頁)

この「空間」は「不可侵の所有権、自由、自立」が排他的に行使される空間であった。「資本のもとへの部分労働者の無条件従属を、労働の生産力を高くする労働組織として賛美するブルジョア的意識が、同時に、声高く、社会的生産過程のいっさいの意識的社会的な統御や規制を、個別的資本家の不可侵の所有権や自由や自律的「独創性」の侵害として、非難するのである。……全社会を一つの工場にしまう」(466 頁)

おわりに

『資本論』における「閉ざされた空間」についての、論考はすでに終わった。若干、引証のウェイトが高くなっている。しかし、空間、地域、地域経済圏などにおける自立した、閉じられた空間があること、それがゆえに接触という

言葉があることが明らかになった。ただ付言すれば、本稿は、閉じられたという点を一方的に主張するものではない。例えば、閉じられた空間の中には、仲のよい夫婦がいる家、干渉せずに支えあい交流がある地域、人口は少ないが高齢になっても働く、緑豊かな過疎の山村、一つの高い目標をもった国家、繁栄への道を歩む 21 世紀アジア経済圏、アメリカ、アジア、EU この 3 者の平等互惠の国際分業関係などなど、閉じられた系は発達を保障する場となる事が出来る。

(本稿は、平成 15 年度、名城大学総合研究所基礎的研究促進事業費の助成による研究成果の一部である。経済学の古典にそくして「空間」「地域」の持っている意味を確認した、テーマに接近するための予備作業である。研究テーマは「不況から好況への転換を規定する要因について」である。経済理論において、たとえば「世界恐慌の実証的・理論的分析」など理論的・歴史のアプローチが有力であった。しかし、当該テーマを検討するにあたっては、21 世紀においては景気循環における波動的に生じるイノベーションを先導する「繁栄の中心地の地域的移動」という空間軸での分析が必要である。過去、17 世紀のオランダ、19 世紀のビクトリア朝時代のイギリス、20 世紀のアメリカと、繁栄の中心地が転変してきた。21 世紀における東アジア経済が繁栄の一中心地になる展望の下で、不況局面から好況局面への転化点を検出したい。繁栄局面から恐慌局面には急激に移行するが、恐慌・不況局面から好況・繁栄局面への移行は緩慢である。緩慢な現在の状況のなかで「空間軸」とかわらせて、変動と転化の契機を検出したい。)